（様式５）　　平成31年度（2019年度）　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	31K10	氏　名	蒲生　友作
研究主題 ―副主題―	学校居心地感や教師の信頼感を左右する指導態度に関する研究 ー教師の関わりを中心にー		
派遣先	東京学芸大学　教職大学院	担当教官	小林　正幸
所属	昭島市立拝島第一小学校	所属長	石川　博朗

キーワード：教師　児童　学校居心地感　信頼関係　指導態度　学級経営

1　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

近年、教師と児童との関係がうまくいかずに学級経営に困難を生じるケースが増えている。しかし、児童との関係を築き、年間を通じて安定した学級経営を行っている教師もいる。

児童・生徒の心の状態を良好に保つことは大切であり、河内（2008）は、学校の環境と欠席日数に着目し、児童・生徒が学校生活で楽しく、安心して過ごせることの大切さを指摘している。そのために教師と児童・生徒との関係も重要であり、嶋野（2009）は、教師の指導態度の教育的機能に注目し、中井・庄司（2008）は学級適応感と教師の信頼感の関連について検討を行っている。

学校生活を過ごす上では、河内（2008）の言う児童・生徒が学校での居心地のよさを感じることが大切であり、教師は学級経営などを通してその環境を整える。また、小学校では学級担任と毎日過ごし、児童は学習面や生活指導面からの影響を受ける。ここでは、児童が教師にどれほど師弟関係を信頼しているのかが、重要な側面であろう。その両面に対して、教師の日常的な指導はどのように関わり、児童にどのような影響を及ぼすのか明らかにしていくことは、子供の心理的に健やかな発達を保障する上で意義のあることであろう。

そこで、教師の指導態度が児童の学校居心地感や教師に対する信頼感にどのように影響を及ぼすのかについて、児童の意識と学級担任の具体的な指導の両側面から明らかにしていくことを目的とする。

2　研究の方法

(1) 質問紙調査

「学校居心地感尺度」「教師の指導態度」「教師に対する信頼感尺度」

(2) 授業観察、インタビュー

3　研究の結果

(1) 質問紙調査

① 因子分析

質問紙調査を基に因子分析を行い、第１因子を児童が教師に期待する言動を示した「教師への役割遂行評価・安心感」（以下、役割遂行評価・安心感）と命名した。第２因子を、「学校居心地感」、第３因子を「要求（Demand）」、第４因子を「教師への不信感」（以下、不信感）、第５因子を「受容（Acceptance）」とした。

② 構造方程式モデリング

因子分析から見いだされた５因子で、教師の指導態度である「受容」と「要求」がその他の３因子に及ぼす影響を検討するために、構造方程式モデリング（以下、ＳＥＭ）を用いて役割遂行評価・安心感と児童の学校居心地感に関する因果モデルを構成した。（Fig. １）

その結果、以下のパス係数（標準化推定値）に関して有意な結果が認められた。

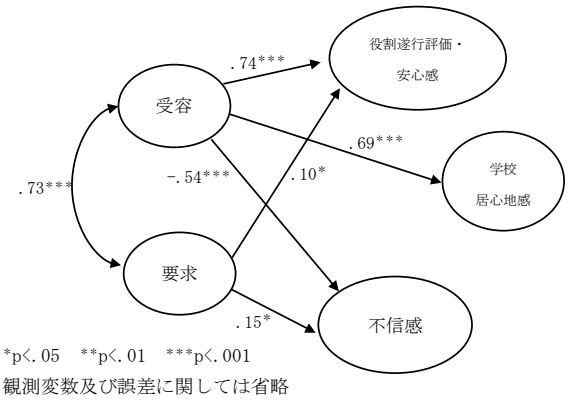

Fig. 1　役割遂行評価・安心感と学校居心地感に関する因果モデル

この結果、「受容」は、「役割遂行評価・安心感」や「学校居心地感」に対して大きな影響を及ぼすことが示された。「要求」は「役割遂行評価・安心感」や「不信感」に対してどちらにも弱い影響があることが認められた。

③　分散分析

各学級の児童が、担任の教師の指導態度を総じてどのように評価をしているのかに応じて、信頼感や学校居心地感に相違が出てくるか否かを「受容」と「要求」の２因子を基準として、対象を４群に分けた。その上で、その４群間を分散分析により比較した。(Fig. ２)

その結果、「受容」と「要求」が共に高い両高群では、「学校居心地感」や「役割遂行評価・安心感」は、他の学級の児童よりも高く評価されることが示された。一方、受容低要求高群は、「不信」が高く、受容低要求低群がそれに次いで高くなることが示された。

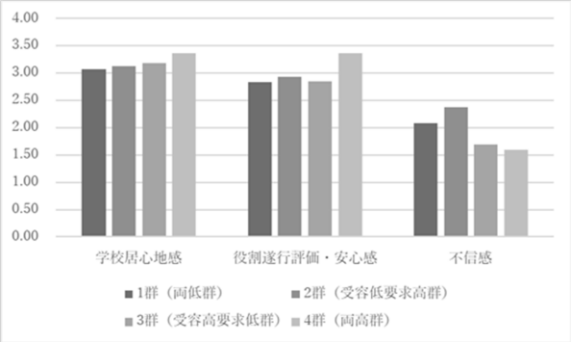

Fig. ２　４群間の「学校居心地感」「役割遂行評価・安心感」「不信感」への差異

⑵ 授業記録とインタビュー分析

授業観察と担任へのインタビューを行い、両高群とその他の学級に分けて質問紙調査との関連を調べた。授業中の教師の発言を、「受容の言葉かけ」（例：「この意見分かりやすくていいね」など称賛する言葉かけなど）と「要求の言葉かけ」（例：「書く活動のときにはお話をしません」や「廊下を走る行為は危ないです」など学校生活における注意を促すような言葉かけなど）ごとに、出現頻度をまとめた。(Table１)また、各担任に学級経営に関するインタビューを行い、「受容的発言量」（例：「教師と児童、児童同士などで手紙やノートを交換して、気持ちが通じ合うようにしています」など）と「要求的発言量」（例：「教師の価値観も伝えて学級のルールを守っていくようにしています」など）について、総字数に応じた割合を示した。(Table２)

授業観察では、両高群とその他の学級では差異がなかったが、教師の学級経営に関する意識について両高群の学級では、受容的発言量が有意に多く、要求的発言量が有意に少ないことが明らかになった。

Table１　両高群の学級とその他の学級の「受容の言葉かけ」と「要求の言葉かけ」の平均出現回数

	「受容の言葉かけ」出現回数	「要求の言葉かけ」出現回数
両高群の学級	15.8	4.1
その他の学級	11.2	10.3

Table２　両高群の学級とその他の学級の「受容的発言」と「要求的発言」の平均パーセンテージ

	受容平均（%）	要求平均（%）
両高群の学級	39.7	18.2
その他の学級	23.2	31.0

この結果、両高群の担任は授業中の言葉かけや自分の学級経営上の指導について、児童と関わることや児童の気持ちを受け取ることを大切にしていることが分かった。

４　研究の考察

「学校居心地感」や「役割遂行評価・安心感」には教師の「受容」する態度が大きく影響することが示され、「両高群」が示すように、「受容」と「要求」双方の指導態度が「学校居心地感」と「役割遂行評価・安心感」を高めるためには重要である一方で、「要求」のみが高い場合は、「不信感」を増すことが示された。このことから、「受容」の指導態度を基盤として「要求」する指導態度が示すことが、良好な学級経営に必要であることが示唆された。

以上のことから、「学校居心地感」や「役割遂行評価・安心感」を高めるために大切であろう点をまとめる。

① 児童の気持ちや行動を受け止める「受容」する指導態度が必要不可欠であり、それを基盤としながら、「要求」する指導態度で学習規律を確立していく。

② 教師の個性を生かし、児童との心がつながる活動を通して学校生活を支えていく。

５　今後の展望

今後の課題として、学習規律や学級秩序は「役割遂行評価・安心感」や「学校居心地感」とどのような関わりがあるのかを調査したり、４月の教師の取組が、学級経営に対してどのような効果をもたらすかを検証したりすることが必要と考える。